

閑院宮和歌資料―閑院宮御会短冊を中心に―

杉本まゆ子

はじめに

閑院宮旧蔵資料は、昭和六三年に戸田華子氏（閑院宮載仁親王の五女）より寄贈されたものである。東山天皇皇子直仁親王によって宝永七年（一七一〇）に創立された閑院宮は、歌道と入木道（大師流）を得意としていた。歌道関係資料のうち古今伝受関係は、すでに平成一七年の恒例展示会において公開したが、その後整理した和歌短冊六五部二三九一枚に関しては、書陵部紀要六二・六三号彙報欄で目録情報のみ公開した（表一に相当する）。閑院宮に蔵された短冊は、親王の御詠草と門弟の詠草で成り立っており、歌道教授を行う閑院宮の実態がうかがえるものである。なお、資料を紹介するとともに、この短冊類の整理方法についても併せて述べたい。

一、形状等と整理

まず書陵部に入った時点の状態を示し、現在どのように弁別し整理したか

を記しておきたい。

1. 包紙

短冊は包紙でくるまれ、ほぼ詠歌機会ごとに分けられており、「明和六年六月二日摩尼浄院宮十七回忌追善」（閑・三三三）「西十二月」（閑・三五五）などの原装もしくはそれに近い時代のウハ書を持つものと、白紙のものがある。それに宮家で近代に付けた「九号包25」などのラベルが貼付されている。ウハ書の当座歌会などの情報は、明らかな間違いのない場合はそれを踏まえて整理書名をつけた。また、ひと包みの中の並び順に関しても、とくに不審がない限り変えなかった。他の出詠者と明らかに違うもの（題や在世の期間によって判明）は、その並びの後ろに回した。また、当主の詠草には「九号包六 九十五枚ノ内 其六在中」（閑・三三三）等の近代の貼り紙があるものも多く（包紙・短冊とも）、この順序も改めなかった。

現在は短冊を伸ばした状態で包紙に収められているが、短冊に三折りの跡があるものも多い。また水引で綴じたものもある。これに関しては後述する。なお、当主の短冊は包みをまとめて、バラフィン紙で親王ごとの括りにされていた。しかし年月を経て劣化し裂けていたので、その部分を裁ち落とし、

字のある所を残した。

2. 料紙

素紙の短冊と打曇（青・紫）の短冊がある。当主の詠草には素紙が多く見られるが、それ以外はほとんど打曇である。たとえば、典仁親王の短冊（閑・三〇三、五一九枚）のうち、打曇は五一枚、刷文様の色短冊が三枚で、ほかはすべて素紙の短冊である。素紙の短冊は下書きか手控えて、禁裏・仙洞御所での月次御会等や自邸での歌会のものと考えられる。「典仁」の署名のない短冊も多い（七二枚）のがその証左であろう。

また、「西十一月松辺千鳥愛徳以下」のウハ書がある「閑院宮御会短冊寛政元年十一月」（閑・三〇五）など自邸で催したと思われる月次御会の包みには典仁親王や美仁親王の詠草が入っており、当主詠草はほぼ抜き出されていることがわかる。

また、ひと包みの中に、寸法の異なるものが入っていることがまある。

閑・三〇五は、「夏懷旧／実光以下九十三枚」とウハ書された包紙に、「夏懷旧」と題が書かれた上紫の打曇短冊に始まり、次が上青の正親町実光の「うつしうへて軒端をめぐる呉竹の葉風すゞしき夏はきにけり」と続く短冊が収められている。押小路実岑（二七〇年薨）から赤尾可官（一八五三年没）までの詠があつて、一度の歌会ではないのは明らかである。

これらの短冊は寸法により、以下に分かれる。（単位はセンチメートル）

ア三六・五×六・〇（七枚）	イ三六・八×六・〇（三五枚）
ウ三七・五×六・一（二二枚）	エ三七・三×六・〇（一二枚）
オ三八・三×五・七（一四枚）	カ三七・〇×六・三（一枚）
キ三七・六×六・四（一枚）	ク三七・九×六・四（一枚）

アは「夏懷旧」と同寸のもの。「甲ひの懷紙、短冊の事、（中略）短冊をば紫を上になして書べし」（和歌道作法条々）とあるように、追善詠に用いたとわかる。アの中には上青もあるが、「十年のあまりみとせの夏に」（為村）「なく音にも昔ぞしのぶ」（行忠）など、追善詠であることは明らかで、雅香の「六月のすぎにしけふを」と合わせると、明和二年（一七六五）六月二日の直仁親王十三回忌の折とわかる。

イはすべて題のある短冊なので当座歌会のものと考えられ、押小路実岑の薨年から考えて直仁親王のもとでおこなわれたと推測できる。ウとエは、夏と竹が詠み込まれており、出詠者も履歴のわかる範囲では一七九〇年頃生存の人物ばかりであるが、ウが藤木保矢・平田元敷ら地下官人と、義源・重道・道瑞ら姓不明の人々、エが三条西廷季・烏丸資重ら堂上、と分かれており、同じ題で堂上と地下に分けて歌会をおこなったと考えられる。

オは、出詠者から判断しエと同時期であるが、田を詠み込んでおり、カ（実光）・キ（北大路祥光）も寸法は違うものの田が題材なのでオのツレ、ク（正親町公明）は「竹の影」と詠んでいるので、エのツレと考えてよいだろう。

なお、閑院宮旧蔵短冊の大部分は堂上か地下官人なので履歴を追えるが、中には詳細不明の人物がいる。（表二）ではその場合補足欄に「？」を付しておいた。同じく補足欄に本姓が書いてあるものは、短冊に「秦宗興」などとあるが家号が不明な人物である。また女性の詠草と思しきものが数点見られるが、どれにも裏に名前が無いので、包紙等の記載を利用した。

3. 書名

整理書名は（表一）に上げた通りだが、包紙ウハ書をそのまま採ることは

しなかった。以下、短冊の整理と書名の付け方を記しておきたい。

①追善和歌

追善和歌は、ウハ書に「明和六年六月二日 懷旧涙 出題為村卿／摩尼淨院宮十七回忌追善」(閑・三〇三) などとあるが、整理書名は「直仁親王十七回忌追善短冊明和六年」とした。これは男性の場合で、女性の場合は、親王の生母など俗名不明の場合がある上、俗名の知名度が低く利便性に欠けるので、院号のままとした。

②御会和歌

ウハ書などに催行日が書かれ、凡そ内容と齟齬を来さなければそのまま「閑院宮御会短冊〇年〇月〇日」とした。また「閏六月」(閑・三〇五) などと書かれていれば、それを元に定めた。年次がわからないもののうち、歌題が通題である場合は、題を書名に添え、題が様々な場合は、出詠者名を添えた。

③その他

閑院宮旧蔵短冊の中には、在世の時期が合わない人物の詠草がまとめられている包みも存在する。それらは便宜的に一名の名を挙げ、「——他詠草短冊」などとした。

以上①～③のような方針で書名を付けた上で、時期、出詠者を一覧にしたものが〈表二〉である。おおよそ家格ごと(皇族、摂家、大臣・清華、羽林名家、半家、地下、不明)に分け、その中で年代順に並べた。

二、考察

次にこの短冊が資料として興味深い点を挙げる。

1. 故実書との違い

和歌会には作法があり、『和歌秘伝聞書』や『和歌道作法条々』では、短冊を用いた歌会の作法も記している。それらによれば歌会の終了後、短冊は「手一束につめ候て一結びにすべし」(和歌道作法条々)と、水引で綴じるのが故実であるが、本資料群の中で綴じてあるのは、閑・三〇三～三〇七である。三〇四～三〇七は包紙から当座和歌と明らかであるし、三〇三・三〇四も各短冊に題が書かれており当座和歌であろう。

これら以外にも御会で詠まれたものは多いが、叙上の詠草だけが綴じられている。ただし、蝶結びであり「一結び」とは異なっている。一旦解かれたものと考えるべきだろう。

なお、閑・三〇三の短冊は裏面に年月日または月日を書いてあり、九名(表二参照)の享保八年の一年分をまとめて綴じていることがわかる。『和歌秘伝聞書』によれば「一、短冊うら書様。上二寸三分置て、年号月日書て、さしさげて左の脇に当座と可書」とあるが、「当座」等の文字はない。故実書からの隔たりが見てとれよう。

2. 当主と歌会

〈表二〉を見ると、詠草の分布に偏りがあることがはっきりとわかる。最初の区切りは、宝暦三年(一七五三)直仁親王の薨去までであり、それまでで目立つのは、閑院宮諸大夫の浅井国幹・光尚親子をはじめとする地下官人と、近衛家久である。

浅井国幹は閑・三〇四、三〇五と直仁親王や近衛家久とともに歌を詠み(短冊が一緒に綴じられている)、三〇七、三〇七では、羽林家の八条隆英らと詠んでいる。閑・三〇五の詠作時期である享保一四年には従五位上に上っているとは

いえ、破格の扱いといえよう。直仁親王の歌会は、内々のものと考えてよい。なお、口絵写真に掲げたように、直仁親王は近衛家熙（真覚）の指導を受けていたことがうかがえる。以後も、家久、内前、経熙、と詠草が残っており、内前女である因子は美仁親王妃となっている。

典仁親王が明和二年（一七六五）に手仁遠波伝受を受け門人を持てるようになり、天明元年（一八二一）に光格天皇の和歌師範になって最高潮を迎える。天明三年（一七八三）には美仁親王も典仁親王より手仁遠波伝受を授かり弟子をとれる資格を得た。こうして歌の家として着実に地位を固め、勿論光格天皇の実父であるという典仁親王の立場も優位に働き、門弟も増え、月次歌会を開くに至ったのである。

なお、年次の明らかな資料は美仁親王の薨去以前で終わるので、それ以降の閑院宮での和歌活動は不明である。第四代孝仁親王が三三歳で薨去（文政二年に光格上皇より手仁遠波伝受有）、第五代愛仁親王が二五歳で薨去するので、主体的な和歌活動を為しえないうちに生涯を閉じたとするべきであろう。

おわりに

閑院宮旧蔵資料の整理は途上であるが、現在確認出来る限りの短冊資料を今回示した。歌道の場合、遠方にも門人がおり、書状による添削は行えるのであるが、添削された懷紙類は門人の手に戻るので、入門・伝受の際の誓状、門人帖以外に門人を確認することは難しいので、この資料により初めて門人の把握が出来、具体的な活動を知ることができた。また地下官人の自筆資料

を見いだしたことも今後の研究に資することができたように思う。今後も閑院宮・有栖川宮の整理を通じ、近世中後期の和歌御会を明らかにしていくことを課題としたい。

注

（１） 山本啓介氏著『詠歌としての和歌 和歌会作法・字余り歌―付（翻刻）和歌会作法書―』（新典社、平成二二年）に『和歌秘伝聞書』『和歌道作法条々』の翻刻がなされている。本論文の引用はこれを用い、適宜漢字に直した。

（２） 神作研一氏著『近世和歌史の研究』（角川書店、平成二五年）第一部第二章「元祿の添削」に詳しい。

〈表1〉 (函号の関は省略した)

番号	書名および頁数				
三〇三	直仁親王御短冊	九二枚	三〇四三	閑院宮御会短冊享保八年	一六五枚
	(附) 近衛家熙口陳 (一通) 真仁親王御短冊 (二枚)		三〇四四	閑院宮御会短冊享保九年二月三日	五枚
三〇三三	典仁親王御短冊	五一九枚	三〇四五	閑院宮御会短冊享保一四年一〇月二二日	一〇枚
三〇三四	美仁親王御短冊	五九三枚	三〇四六	閑院宮御会短冊享保一五年三月二五日	一〇枚
三〇三五	愛仁親王御短冊	一〇一枚	三〇四七	閑院宮御会短冊享保一六年三月五日	一〇点
三〇三六	職仁親王等御詠草	九点	三〇四八	閑院宮御会短冊天明八年七月	三枚
三〇三七	孝仁親王御短冊	四八枚	三〇四九	閑院宮御会短冊天明八年八月	五枚
三〇三八	成善提院一周忌追善短冊等明和九年	五点	三〇五〇	閑院宮御会短冊天明八年九月	五枚
三〇三九	成善提院三回忌追善短冊等安永二年	六点	三〇五一	閑院宮御会短冊天明八年一〇月	八枚
三〇四〇	成善提院七回忌追善短冊安永六年	五枚	三〇五二	閑院宮御会短冊天明八年十一月	九枚
三〇四一	成善提院十七回忌追善短冊天明七年	六枚	三〇五三	閑院宮御会短冊天明八年十二月	八枚
三〇四二	直仁親王七回忌追善短冊宝暦九年	一七枚	三〇五四	閑院宮御会短冊寛政元年四月	一七枚
三〇四三	直仁親王十七回忌追善短冊明和六年	一七枚	三〇五五	閑院宮御会短冊寛政元年閏六月	一七枚
三〇四四	直仁親王二十五回忌追善短冊安永六年	一五枚	三〇五六	閑院宮御会短冊寛政元年七月	一六枚
三〇四五	直仁親王三十三回忌追善短冊天明五年	二一枚	三〇五七	閑院宮御会短冊寛政元年十一月	一六枚
	(附) 追善和歌御点人数 (一通)		三〇五八	閑院宮御会短冊寛政元年十二月	一三枚
三〇六六	心親院三回忌追善短冊安永二年	三枚	三〇五九	閑院宮御会短冊寛政三年九月	一二枚
三〇六七	深仁親王等詠草御短冊	七枚	三〇六〇	閑院宮御会短冊寛政四年四月一日	五三枚
三〇六八	公啓親王御詠草等短冊	三枚	三〇六一	閑院宮御会短冊寛政四年六月一日	二四枚
三〇六九	近衛内前詠草等短冊	四枚	三〇六二	閑院宮御会短冊寛政四年十一月	一〇枚
三〇七〇	典仁親王等詠草御短冊	四枚	三〇六三	閑院宮御会短冊寛政四年十二月	五枚
三〇七一	甘露寺規長他詠草短冊	五枚	三〇六四	閑院宮御会短冊寛政六年四月	五枚
三〇七二	芝山重豊詠草短冊等	二点	三〇六五	閑院宮御会短冊寛政六年四月六日	六枚
			三〇六六	閑院宮御会短冊寛政六年五月	九枚
			三〇六七	閑院宮御会短冊寛政六年六月三日	一五枚
			三〇六八	閑院宮御会短冊寛政六年六月二六日	一三枚
			三〇六九	閑院宮御会短冊聖廟法楽文化七年	一〇枚
			三〇七〇	閑院宮御会短冊聖廟法楽文化八年	一〇枚
			三〇七一	閑院宮御会短冊平松時行他	一五点
			三〇七二	閑院宮御会短冊交野惟康他	一六枚
			三〇七三	閑院宮御会短冊下冷泉宗家他	二七枚
			三〇七四	閑院宮御会短冊平田元敷他	八〇枚
			三〇七五	閑院宮御会短冊典仁親王他	六二枚
			三〇七六	閑院宮御会短冊正親町公明他	一枚
			三〇七七	閑院宮御会短冊夏懐旧等	九三枚
			三〇七八	閑院宮御会短冊山落葉	一〇枚
			三〇七九	閑院宮御会短冊待郭公	一九枚
			三〇八〇	閑院宮御会短冊月前郭公	一五枚
			三〇八一	閑院宮御会短冊江上納涼	一六枚
			三〇八二	閑院宮御会短冊深夜見月	一六枚
			三〇八三	閑院宮御会短冊遙聞鹿声	一六枚
			三〇八四	閑院宮御会短冊殘菊帶霜	一五枚
			三〇八五	閑院宮御会短冊春山木枯	八枚

[illegible]

[illegible]

函架番号（関は省略）				3043	3045	3046	3047	3073	3071	3072	3032	3044	3033	3040	3028	3029	3036	3034	3030	3035	3039	3031	3048	3049	3050	3051	3052	3053	3054
開催時期（西暦）				1723	1729	1730	1731	1725 ～ 38	1726 39	1726 ～ 39	1759	1765	1769	～ 1772	1772	1773	1773	1777	1777	1785	～ 1785	1787	1788	1788	1788	1788	1788	1788	1789
通理	久世	1782	1850																										
公隆	武者小路	1785	1855																										
有長	綾小路	1792	1881																										
重豊	芝山	1703	1766		*	*	*	*		*	*																		
惟肅	交野	1706	1739		*	*	*	*	*	*																			
光綱	柳原	1711	1760																										
規長	甘露寺	1713	1784																										
時行	平松	1714	1786					*	*		*		*					*											
兼胤	広橋	1715	1781																										
光胤	烏丸	1723	1780																										
固禪	裏松	1736	1804																										*
益房	清閑寺	1736	1803																										
資枝	日野	1737	1801																	*									
持豊	芝山	1742	1815									*						*		*									
伊光	広橋	1745	1823																										*
光祖	烏丸	1746	1806																										
紀光	柳原	1746	1800																					*	*	*	*	*	*
光実	外山	1756	1821																										
資矩	日野	1756	1830																										*
胤定	広橋	1770	1832																										
資董	烏丸	1772	1814																										*
均光	柳原	1772	1812																					*	*	*	*	*	*
広仲	五辻	1687	1750					*																					
為範	五条	1688	1754																										
永房	高倉	1688	1755																										
兼武	萩原	1693	1765																										
範篤	西洞院	1704	1738		*	*		*																					
長誠	東坊城	1706	1781																										
行忠	石井	1716	1777							*								*											
在家	唐橋	1729	1791																				*	*	*	*	*	*	*
季忠	藤波	1739	1813																								*	*	
在熙	唐橋	1757	1812																									*	
信庸	西洞院	1758	1800																	*			*	*	*	*	*	*	*
行宣	石井	1762	1838																				*	*	*				
祥光	北小路	1763	1819																										
為徳	五条	1763	1823																										
国幹	浅井	1668	1668	*	*	*		*	*	*																			
光枝	小佐治	1693	1764	*																									
成敬	藤木	1704	1769	*																									
光尚	浅井	1704	1745	*				*	*	*																			
国広	浅井	1716	1797					*																					
正重	田中	1718	1755					*																					
通遠	河野	1732	1796																										
証珉	土橋	1734	1799																										
光貞	土佐㇏	1738	1806																										
信郷	羽倉	1739	1800																										
亮長	赤尾	1740	1812																										
方副	陌間	1741	1804																										
武経	山崎	1747	1819																										
保矢	藤木	1749	1800																										
正興	山科	1752	1795																										
応門	吉田	1752	1824																										
源永	今大路	1754	1814																										
道貫	山本	1756	1830																										
榮全	山中	1760	1796																										
宗恒	山本	1760	1823																										
元敷	平田	1761	1813																										
職登	小野	1761	1801																										
国房	浅井	1762	1797																										
可官	赤尾	1764	1852																										
平康	矢守	1769	1838																										
正章	田中	1771	1809																										
景雷	国栖㇏																												
之駿	伊藤																												
正任	？		*																										
貞救	？		*																										
秀政	？		*																										
元重	？		*																										
道瑞	？																												
正衛	？																												
懷英	？																												
義源	？																												
元璞	？																												
宗清	？						*																						
元成	？						*																						
宗興	？（本姓・秦）																												
重道	？（本姓・藤原）																												
綱有	？（本姓・源）																												
慶□	？																												